

いちご「スカイベリー」の摘花による品質向上技術の 確立

要約

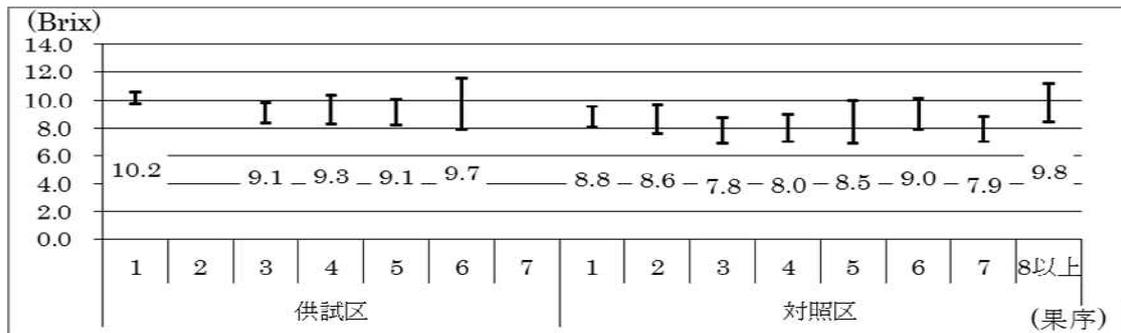
頂花房から二次腋花房において、各花房5花残しによる摘花を行った結果、株当たりの収量は減少したものの、くすみ・黒ずみ果の発生は少なくなり、頂花房及び一次腋花房では、平均糖度も安定する傾向がみられた。また、二次腋花房までの平均果重は21g以上となった。

○ 展示のねらい

いちご新品種「スカイベリー」の果実品質については改善傾向にあるが、個人差が見受けられる。今後の普及拡大を図る上で、果実品質の向上が必要であるので、摘花による品質向上を図るとともに、導入による経営改善効果について実証する。

○ 主な成果

図1 一次腋花房の各果序ごとの平均糖度



一次腋花房では、供試区で各果序の平均糖度は9度以上となったが、対照区は、第3果・第7果で8度を下回るなど、全体的に低い傾向となった。

表1 果序ごとの平均1果重

		第1果	第2果	第3果	第4果	第5果	第6果	第7果	第8果以上
頂花房	供試区	54.5		44.6	39.3	38.2	36.0		
	対照区	54.8	50.6	38.7	35.3	39.2	31.0	29.2	21.5
一次腋	供試区	67.6		50.0	37.1	35.1	31.1		
	対照区	51.9	45.6	42.5	44.7	30.8	27.5	19.8	16.5
二次腋	供試区	52.8		34.1	28.9	25.3	22.6		
	対照区	44.9	32.3	26.7	21.6	19.4	18.9	16.9	18.8

平均1果重は、果序が進むと減少する傾向が見られたが、供試区の頂花房では二次腋花房の第6果でも22.6gとなった。対照区では、頂花房第8果で21.5gとなり、一次腋花房では第7果以降、二次腋花房では第5果以降が20g未満となった。

○ 今後の方向性

頂花房の1番果で先端まだらが発生すると、摘花を行った場合全体の収穫果数が減ることでロスの割合も大きくなるため、先端まだら果の発生抑制対策がより重要となると考えられる。摘花は、果実品質向上に効果があるが、管内において従来品種では実施されておらず、農家の負担となる作業であるため、取組を推進する上では、スカイベリーにおける品質向上の重要性について理解を得ていく必要がある。

実施機関：塩谷南那須農業振興事務所経営普及部

実施場所：那珂川町

問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315